

ブドウの発育周期と休眠打破に関する研究

(第1報) 主要品種の休眠明け時期について

姫野周二・緒方俊雄・平山好見・宮崎政善

(大分県農業技術センター)

HIMENO, S., OGATA, T., HIRAYAMA, Y. and MIYAZAKI, M.

Studies on the Period of Growth and the Breaking Dormancy on Grapevines

(1) On the Period of Breaking Dormancy on Delaware and Campbell Early Varieties

近年さかんになったハウス栽培において経済的および樹体の生理上の理由から、自発休眠の完了時期が重要視されて来た。本県のキャンベル・アーリーは他県に比べると休眠明けが遅いと言われてきているので、ハウス栽培技術確立のため本県における主要品種(デラウェア、キャンベル・アーリー)の休眠明け時期について、1973年以來検討を加えてきたのでその一部について報告する。

試験1 西日本におけるデラウェアの主要産地である大阪、鳥取、福岡と本県との休眠状態を比較するため、1974年1月9日に採穂した切枝を、1月14日に加温を開始した。切枝は第5節の芽を用い、下は2.5cm以上、第4節との節間中央で水切りし、上は第6節との節間中央で切り、各25芽を水盤に挿し、室温25℃、湿度80%以上の大型恒温室に入れ発育を調査した。

各発育期とも大分が最も遅く、催芽期で2日、ほう芽期および展葉期では最も早いところに比べ4~5日の差があった。

試験2 短しょうせん定6年生樹のデラウェアを1973年9月23日から1974年2月26日の間に12回、当日採穂した25~30枝を、試験1と同様の処理をして、発育を調査した。

ほう芽までの所要日数の減少傾向は、1月25日を境に小さくなった。催芽と展葉についても、ほぼ同様の傾向を示した。ほう芽率は、9月~12月の間増加したが、その後は1月20日と2月14日を除き90%以上で一定であった。

試験3 1974年12月13日~1975年3月8日の間、1週間ないし3~4日の幅で16回にわたり、デラウェアとキャンベル・アーリーの短しょうせん定7年生樹の切枝を用いて試験した。

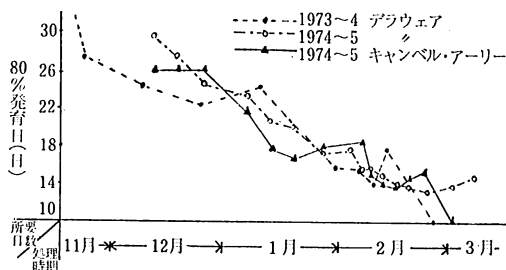
デラウェアでは、各発育期までの所要日数の減少傾向が1月27日を境に横道いとなった。ほう芽率は全時期を通じ80%以上でほぼ一定であった。キャンベル・アーリー

では所要日数の減少は、1月13日を境にその傾向は変わった。ほう芽率はほぼ100%であった。

以上により、本県におけるデラウェアの自発休眠明けは、西日本主要産地に比べやや遅いようで、1月中旬の発芽所要日数が多く、その時期は休眠の深さによる発芽所要日数曲線から、1974年が1月10日~25日、1975年が1月20日~27日で、ほぼ1月下旬であるが、両年の発芽所要日数の減少傾向に違いが見られる。これらの原因と、冬期の気象条件および樹体の栄養状態と休眠明けについて検討する必要がある。また、キャンベル・アーリーは1月6~13日のほぼ1月中旬で、デラウェアより約10日早かった。

第1表 生育地における比較(デラウェア, 1974)

項目 生育地	80%発育日			ほう芽率 %	樹令	台木	土壌
	催芽	ほう芽	展葉				
大阪	16日	21日	23日	96	11年	5BB	
鳥根	14	19	25	88	13	5C	海岸砂土
福岡	16	21	24	100	9	5BB	花崗岩土壌
大分	16	24	27	100	6	1,202	重粘土



第1図 デラウェアおよびキャンベル・アーリーの催芽所要日数の変化(1973~5)